

# 団塊世代の音楽受容にみる階層性 —音楽体験の変遷を中心とした分析から—

横浜国立大学大学院 環境情報学府 博士課程後期 (2013年12月修了)

長谷川 倫子

Hierarchy in the Musical Acceptance of Dankai (Baby-Boom) Generation  
— from Analyses Focusing on the Changes of Their Musical Experiences —

Noriko HASEGAWA,  
Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

## 要旨

第二次世界大戦後のベビーブーマーである団塊世代へのアンケートで、彼らは青年期に流行した音楽（フォークソング・グループサウンズ・ビートルズ）を自らの世代観として上位に挙げている。団塊世代と音楽の関わりを研究するため、彼らに音楽体験や世代観をインタビューし、その語りを分析ワークシートを用いて構造化した。そこから、「団塊世代における格差・階層意識は、音楽の受容とも関連があるのではないか。」という問題意識が生成された。次に、日本版 General Social Surveys (JGSS-2003・2008) やインターネット調査のデータを用いて、時系列で団塊世代の音楽受容の特徴や階層性との関連を統計的に分析した。その結果、団塊世代が子供の頃の生活レベルや音楽環境は父親の影響を受け、それが現在の音楽聴取や階層帰属意識にも繋がっていることが見出された。また、クラシック音楽は女性や教育年数が長い層に、演歌は男性や教育年数が短い層に好まれていた。団塊世代は多様な音楽ジャンルを好み、複数嗜好の場合、演歌の影響力は大きかった。さらに、親世代→団塊世代→子世代という世代間において、高学歴とクラシック音楽嗜好の継承がみられた。質的・量的研究により、「団塊世代は一括りにされるが、人数が多く競争が激しかった。そこには格差・階層意識が存在し、それは音楽の受容とも様々な関連をしていた。そして、その関連は他世代に比べより顕著であった。」という結果となった。

## ABSTRACT

In answer to questionnaires to the Dankai Generation (Post-World War II Baby-Boomers), they ranked high of such music (folk song, “group sounds” and the Beatles), which were popular in their youth, as images of their generation. In order to study the relations between the Dankai Generation and their music, I interviewed them about their musical experiences and generational images, and got their talk structured by using various analysis worksheets. Consequently, a hypothesis was generated: “Disparities and hierarchy consciousness existing in the Dankai Generation might be related to their musical acceptance.” Next, by utilizing some data based on Japanese version of General Social Surveys (JGSS-2003&2008) and the Internet investigation, I analyzed the relations statistically between characteristics of the Dankai Generation’s musical acceptance and hierarchy in chronological order. It turned out that their living level and musical environment in childhood were affected from their fathers, and that the fact has led to their current music appreciation and stratum identifications. In addition, it proved that classical music was favored among women or those with longer-term education, while Enka ballads were favored among men or those with shorter-term education. The Dankai Generation, however, likes various musical genres, and in terms of plural tastes, Enka ballads had a strong influence. Furthermore, it showed that as generations change from their parents to the Dankai Generation and to their children, higher educational background and a penchant for classical music has been succeeded. By my qualitative and quantitative studies, I have reached the following conclusion: “Although the Dankai Generation has been lumped together, there were so huge numbers of people that competitions were intense among them. There existed disparities and hierarchy consciousness, which were closely related with their musical acceptance. Above all, the relations were more remarkable than other generations.”

## 1. 研究の背景

第二次世界大戦後、1947～49年のベビーブームに生まれた約806万人を「団塊世代」と呼ぶ。これは、作家の堺屋太一が自らの小説<sup>(1)</sup>で命名したものであるが、1947～49年生まれは人口が突出して多いという観点から、狭義の団塊世代と定義される。一方、時代的・文化的・思想的な共通性からの分類として、1947～51

年生まれを広義の団塊世代と捉えられる場合もある<sup>(2)</sup>。本研究では、音楽との関連という文化的視点での研究であるため、広義の1947～51年生まれを団塊世代として扱うこととする。この5年間で生まれた団塊世代(広義)は、現在の日本の人口の約1割を占めるボリュームのある世代である<sup>(3)</sup>。

その団塊世代が2007年頃から退職期を迎え、2013年では多くが完全退職し、高齢期への移行期を迎えて

いる。それに伴い余暇活動を楽しむなどライフスタイルの変化もみられるようになった。

団塊世代への「自分たちの世代観調査」<sup>(4)</sup>があり、「受験戦争」「人が多い」「学園紛争」に次いで、「フォークソング」「グループサウンズ」「ビートルズ世代」が上位に挙げられている。これは団塊世代の青年期に流行した音楽である。音楽が自らの世代観の代表として3つも挙げられていることから、団塊世代は音楽と関わりが深いのではないかと考えられる。

## 2. 研究目的

突出した人口を占める団塊世代が高齢期への移行期を迎えている。その団塊世代の世代観において音楽との関わりが多いことに注目し、彼らが子供の頃から現在に至るまで、その音楽体験を調査する。そこから、競争社会を生き抜いてきた団塊世代の音楽受容の特徴とその中にもみる階層性との関連を分析・考察することを研究目的とする。

## 3. 研究方法

本研究は、団塊世代の音楽体験についての語りを分析する研究であるとともに、世代研究でもあるため、質的・量的による複眼的な視点での研究方法が必要だと判断した。

研究Ⅰの質的研究では、団塊世代の音楽体験・音楽観・世代観をインタビューした。質的研究にも科学性を担保するため、インタビューデータの重要部分を分析ワークシートで示して概念化し、さらにカテゴリとしてまとめた。それを構造化して結果図として表した。研究Ⅱの量的研究では、団塊世代の音楽受容の特徴やその階層性との関連を、大規模社会調査(JGSS-2003,2008)<sup>(5)</sup>や長谷川(筆者)が実施したインターネットアンケート調査<sup>(6)</sup>のデータを用いて統計解析した。

## 4. 結果

研究Ⅰでは、分析ワークシートを用いたインタビューデータの質的分析により、「団塊世代には格差・階層意識が強くあり、それは音楽の受容とも関連があるのではないか。」という問題意識が生成された。研究Ⅱでは、この問題意識を量的分析により時系列で検証す

ることとした。

まず、団塊世代が15歳頃までの生活レベルと音楽環境の関連について、重回帰分析と因子分析の結果をもとに、パス解析(構造方程式モデリング)を行った結果、図1のようなパス図ができあがった。ここから、15歳頃の世帯収入レベルは父親の教育年数(学歴)が影響し、それは家庭での音楽環境にも関連していたことがわかった。この父親の教育年数は、後の団塊世代の音楽聴取頻度に影響し、さらには階層帰属意識にも関連していた。これは他世代との比較から、団塊世代のみの特徴であった。

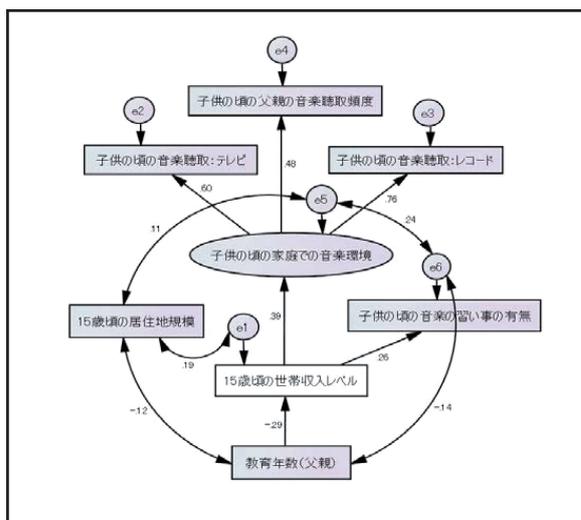


図1 15歳頃の世帯収入レベルと音楽環境のパス解析  
n=375, df=10,  $\chi^2=16.942$ , p=0.076, CFI=0.982, RMSEA=0.037

次に、青年期に好きだった音楽ジャンルを主成分分析した結果、①ポップスなどの軽音楽系、②歌謡曲・演歌、③クラシック音楽の3つの主成分に分けられた。そのうち、クラシック音楽嗜好には、ハイカルチャーな両親から継承された高い階層性がみられた。演歌嗜好にも継承がみられたが、総じて階層性は低かった。

団塊世代の30～40代は子育ての時期であった。団塊世代の子供たちは真性団塊ジュニア世代(1973～80年生まれ)とも言われる<sup>(7)</sup>。この時期、子供たちへの音楽教育や家族での音楽の共有において、青年期にクラシック音楽が好きだった層と関連がみられた。クラシック音楽を好んだ親に影響され、学校の音楽教育に順応し、自らクラシック音楽を好きになっていき、次世代に継承していこうとする階層性の高さがみられた。

団塊世代の50代半ばから65歳前後までは退職や

雇用の継続により、収入が不安定な時期であり、2013年では完全リタイアが進み、世帯年収は激減した。階層帰属意識にも世帯年収は大きく関連していた。

2003年の音楽の特徴は、カラオケの頻度が階層帰属意識に関連していたことであり、これは団塊世代のみの特徴であった。カラオケは、コミュニケーションのツールであるとともに、一括りにされたくない団塊世代にとって自己表現の場であり、特に団塊世代のみ「生活水準向上の機会」と正の関連がみられた。

2008年の音楽嗜好の調査では、図2のようなパス図が作成された。クラシック音楽とポピュラー音楽は、女性や教育年数が長い層に好まれていた。演歌は、教育年数が短く、世帯年収が低く、子供の頃地方に住み、現在は大都市に住んでいる層に好まれていた。地方から大都市に移動した人たちが多く(約72%)ことから、団塊世代に多くみられた集団就職の人たちの多くが演歌を好むと推測される。しかし、演歌に関しては、管理職の男性(課長級以上で高学歴)の層にも多く好まれており、特に団塊世代は60%以上で他世代と比べ突出して多かった。演歌は仕事上で人間関係を円滑にする音楽ジャンルといえる。

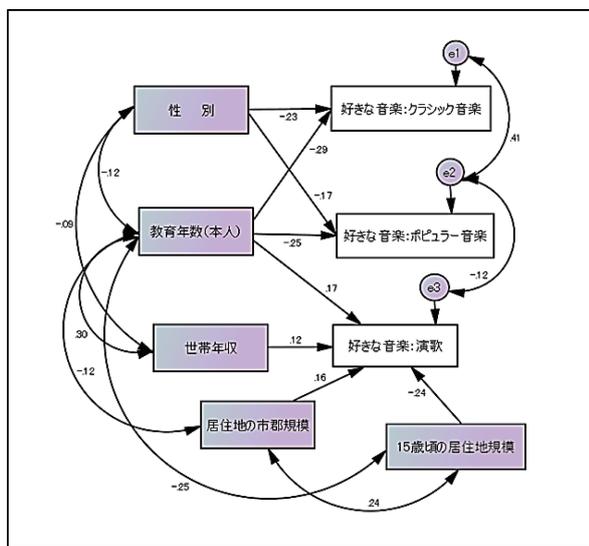


図2 団塊世代の「好きな音楽」のパス解析 (JGSS-2008)  
 $n=255$   $df=12$   $\chi^2=15.240$   $p=0.229$   $CFI=0.987$   
 $RMSEA=0.023$

また、団塊世代の音楽趣味は雑食的<sup>(8)</sup>で文化的オムニボア(大衆音楽と正統音楽の両方を好む)<sup>(9)</sup>であり、本研究でも音楽ジャンルの複数嗜好がみられた。分析の結果、関連要因の影響力は「演歌>クラシック音楽=歌謡曲=海外のポップス」となり、演歌の影響力が強いことがわかった。この影響力に加え、「演歌好き」

は団塊世代を境に後の世代では激減しており、「団塊世代は演歌を好む最後の世代」であるといえる。団塊世代は演歌のような日本的な音楽をベースに、その後西洋音楽が付け加えられていったと考察された。

さらに、両親→団塊世代→子供において、高学歴とクラシック音楽嗜好の相関がみられ、それらは世代間で移動していた。

## 5. 考察

研究Iにより生成された問題意識について、研究IIでその検証を時系列に沿って行った。多くの統計解析から、団塊世代の音楽受容(音楽聴取、音楽嗜好、音楽行動など)の特徴が見出された。そこには父親の教育年数や音楽聴取頻度、子供の頃の音楽鑑賞方法の劇的な変化(ラジオ→テレビ→レコード→テープレコーダー)や、学習指導要領音楽科の改訂(1961年に実施された共通教材による西洋音楽の導入)など、家庭や学校や社会における影響が考察された。また、青年期、子育て期、定年前後などの時期においても、彼らの音楽受容には様々な階層性や性差がみられ、それは階層帰属意識と関連していた。特に、父親の教育年数(学歴や経済力)が家庭での音楽環境をつくり、現在の団塊世代の音楽聴取頻度に関わり、さらに階層帰属意識に関連するという団塊世代のみの特徴から、音楽(特に西洋音楽)をすることにステイタスを感じる世代だと考察された。

以上の質的・量的研究により、「団塊世代は一括りにされるが、人数が多く競争が激しかった。そこには格差・階層意識が存在し、それは音楽の受容とも様々な関連をしていた。そして、その関連は他世代に比べより顕著であった。」という結果となった。

また、今後の団塊世代が求める音楽の方向性も分析した結果、「人生、癒し、ノスタルジア、日本的、楽しさ」を感じる音楽が求められるであろうと考察された。

現在では団塊世代の多くが定年退職し、年金や貯蓄などの経済的格差が広がっている。今後高齢期を生きる団塊世代にとって、このような老年格差は大きな問題となるであろう。そのような時にも音楽を楽しみ、さらには介護が必要となった場合も、高齢者施設等でのカラオケや音楽療法などで癒される高齢期を過ごして欲しいと希望している。

## 引用文献

- (1) 堺屋太一 .1976.『団塊の世代』第1版 . 講談社 .
- (2) 公益財団法人ハイライフ研究所 .2012.「団塊世代の退職後のライフスタイルに関する研究」  
ホームページ <http://www.hilife.or.jp/wordpress/?p=441>  
(2013年12月14日現在)
- (3) 総務省統計局 .2012. ホームページ <http://www.stat.go.jp/info/today/032.htm> (2013年12月14日現在)
- (4) 竹内宏編 .2008.「団塊世代の男女に聞く『自分たちの世代観調査』 暮らしの友」 アンケート調査年鑑 2008年版 vol.21. 杉並書房 :973-985
- (5) 日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター (文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点) が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。
- (6) 平成 25 年 4 月に実施。日本全国の 1947～51 年生まれの団塊世代 500 人 (男 250 人、女 250 人) を対象に、楽天リサーチ社によりインターネットアンケート調査を行った。
- (7) 三浦展 .2005.『団塊を総括する』 牧野出版 :p116-120
- (8) 三浦展 .2006.「 団塊格差 2000 人実態調査」 文藝春秋 9 月号 :186-197
- (9) 片岡栄美 .2008.「芸術文化消費と象徴資本の社会学 --ブルデュー理論からみた日本文化の構造と特徴」 文化経済学 24:13-25